

## コロナ禍における学校休業中の小学校2・3年生と保護者の生活

### —Web調査の結果をもとに—

Lives of second and third graders and their parents during the COVID-19 school closure period  
—Based on the web survey—

伊藤 秀樹<sup>1</sup>, 酒井 朗<sup>2</sup>, 林 明子<sup>3</sup>, 谷川 夏実<sup>4</sup>

<sup>1</sup>東京学芸大学教育学部, <sup>2</sup>上智大学総合人間科学部, <sup>3</sup>大妻女子大学家政学部, <sup>4</sup>明治学院大学心理学部

Hideki Ito<sup>1</sup>, Akira Sakai<sup>2</sup>, Akiko Hayashi<sup>3</sup>, and Natsumi Tanigawa<sup>4</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501 Japan

<sup>2</sup>Faculty of Human Sciences, Sophia University

7-1 Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8554 Japan

<sup>3</sup>Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

<sup>4</sup>Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University

1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo, 108-8636 Japan

キーワード：新型コロナウイルス感染症, 学校休業, 小学校, Web調査

Key words : COVID-19, School closure, Elementary school, Web survey

#### 抄録

本稿では、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う学校休業中に、小学校等（小学校、義務教育学校、特別支援学校小学部）の2・3年生とその保護者がどのような生活を送っていたのかについて、調査モニターを対象としたWeb調査の結果をもとに検討した。その際、①小学校等の1年生とその保護者との共通点と差異、②世帯の暮らし向きや世帯構造による差異、という2点を明らかにすることを目指した。

分析結果からは、2・3年生とその保護者について、保護者の大多数は子どものケアや教育にかなり力を入れて取り組んでいたが、コロナ禍や学校の休業が無視しえない割合の子どもにストレスや不安を生じさせていたこと、学校からの宿題が子どもや保護者に大きな負担をかけていたこと、子どもの勉強の遅れに関する保護者の心配に学校が十分に対応できていなかったことなどの、1年生とその保護者と共通する傾向が見出せた。一方で、1年生とその保護者との差異としては、①保護者による子どもへのケアは1年生ほどには手厚くなかったこと、②保護者が1年生以上に勉強や宿題への不安・心配を抱きやすかったこと、③子どもの登校意欲は1年生より維持されている傾向にあったこと、の3点が明らかになった。

世帯の暮らし向きによる差異としては、暮らし向きが苦しい家庭の方が、学校休業中に子どもの生活リズムを維持することや、子どもの学習環境を整えること、子どもにさまざまなケアを提供することなどが難しかった様子が明らかになった。その背景には、保護者の学校休業中の出勤頻度の高さがあることも示唆された。なお、世帯構造による差異は、今回の分析からはほとんど見出すことはできなかった。

## 1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、2020年2月27日に全国の小・中学校、高校、特別支援学校等に対して、3月2日から春休みまで休業要請が出された。その後、1回目の緊急事態宣言の発令を経て、首都圏や関西圏（とくに京都・大阪・兵庫）では多くの学校で5月下旬から6月初旬まで休業が続くことになった。

本稿では、こうした新型コロナウイルス感染拡大による学校休業中に、小学校等（小学校、義務教育学校、特別支援学校小学部）の2・3年生とその保護者がどのような生活を送っていたのかについて、Web調査の結果をもとに明らかにしていく。その際、焦点を当てて検討するのは以下の2点である。

1点目は、学校休業中の小学校等の2・3年生とその保護者の生活が、1年生とその保護者の生活とどのような点で共通し、どのような点で異なっていたのかということである。本稿で分析を行うWeb調査は、小学校等の1～3年生の保護者を調査対象としており、1年生の保護者の回答結果についてはすでに別稿<sup>[1]</sup>にて公表している。本稿では、別稿で示した1年生の保護者の回答と、2・3年生の保護者の回答をクロス集計によって比較することで、両者の共通点と差異を明らかにする。

今回の学校休業は、どの家庭も十分な準備ができないまま急遽スタートしたものであり、子どもや保護者にさまざまな困難が押し寄せたことが予想される。1年生の保護者の回答結果からは、学校休業中に子どもや保護者が不安やストレスにさらされていたり、さまざまな負担を抱えていたりした様子が浮かび上がった<sup>[1]</sup>。しかし同時に、保護者が子どもに丁寧に関わっていた様子や、子どもたちが比較的規則正しく生活していた様子も見出せた<sup>[1]</sup>。本稿ではこうした1年生の保護者の回答結果と2・3年生の保護者の回答結果を比較し、どのような差異が生じていたのかについて検討することで、1年生だけでなく小学校等の低学年・中学年に射程を広げた、学校休業中の子ども・保護者の生活のより多様な実態を描き出していく。

2点目は、保護者の暮らし向きや世帯構造によって学校休業中の生活にどのような差異が見られたのかということである。別稿<sup>[1]</sup>では、学校休業が1年生とその保護者の中でもとくに暮らし向きが苦しい家庭や片方の親のみで子どもを育てる家

庭に、より多くの負荷をかけるものであったことを見出した。以下では、同様の傾向が2・3年生とその保護者においてもみられるのか、そしてその傾向は強まったり弱まったりするのかについて、クロス集計をもとに検討していく。

いわゆる「コロナ禍」にあつては、被害を受けやすい子どもたち（vulnerable students）が学習の機会やサポートを享受しにくくなること<sup>[2]</sup>や、教育格差が拡大すること<sup>[3][4]</sup>への懸念が表明されている。本稿では小学校等の2・3年生とその保護者の状況をもとに、今後困難に直面しやすい子どもや家庭にいかなる形での補償が必要であるのかについても考察を行う。

## 2. データ

本稿で分析を行うのは、調査会社（楽天インサイト）に登録されている調査モニターを対象に、2020年7月16日～20日に実施したWeb調査の結果である。調査対象は、首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）ならびに関西圏（京都・大阪・兵庫）に在住する、小学校・義務教育学校・特別支援学校小学部の1～3年生の子どもをもつ保護者2,400名（1年生：1,400名、2年生：500名、3年生：500名）と設定した。調査モニターに調査協力の依頼を行い、学年ごとに予定した回答数が得られた時点で調査回答を締め切った。

データの特性については、以下の表1・表2で確認しておきたい。

表1. 回答者（保護者）の属性

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)
<b>回答者の性別</b>		
男性	59.2%	58.6%
女性	40.8%	41.4%
<b>居住地</b>		
首都圏	62.4%	57.1%
関西圏	37.6%	42.9%
<b>現在の世帯の暮らし向き</b>		
豊か	5.0%	5.9%
やや豊か	12.4%	12.3%
どちらかといえば豊か	43.8%	46.2%
どちらかといえば苦しい	23.1%	23.1%
やや苦しい	5.8%	5.1%
苦しい	4.9%	4.4%
わからない・答えたくない	5.0%	3.0%

表1では、回答者（保護者）の属性の分布を、今回注目する2・3年生の保護者の回答と、1年生の保護者の回答に分けて示している。2・3年生の保護者、1年生の保護者ともに、男性の回答者が多い。また、現在の世帯の暮らし向きが豊かな傾向にある回答者がともに6割を超えている。

表2. 子どもの性別と在籍校の特性

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)
<b>子どもの性別</b>		
男子	52.4%	50.8%
女子	47.6%	49.2%
<b>在籍校の種類</b>		
小学校	98.0%	97.7%
義務教育学校	1.2%	1.4%
特別支援学校	0.8%	0.9%
<b>在籍校の設置者</b>		
公立	95.2%	97.3%
国立	0.9%	0.6%
私立	3.9%	2.1%

表2では子どもの性別や在籍校について示した。2・3年生においては男子が若干多い。また、ほとんどが公立の小学校に通っていることがわかる。

### 3. 子どもと保護者の生活の学年間比較

以下では、2・3年生の保護者による学校休業中の生活についての回答を、1年生の保護者の回答と比較しながら確認していく。

#### 3.1. 学校休業中の学校の対応

はじめに、学校休業中の学校の対応がどのようなものであったのかについて、表3～表5をもとに確認しておきたい。

表3以降では、クロス集計のカイ2乗検定の結果が有意（つまり2つのカテゴリー間の割合の差が有意）であった場合、アスタリスク（\*）を付している。\*\*\*は0.1%水準で有意、\*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意であることを示している。

表3. 学校からの休業中の過ごし方の説明

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)	
学校休業中の過ごし方の説明があった	84.2%	88.9%	***

※ %は「十分な説明があった」と「ある程度説明はあった」の合計

表3は、学校から休業中の過ごし方の説明があったかどうかについての回答結果である。2・3年生の保護者では、84.2%が学校からの説明があったと回答している。しかし1年生の保護者と比べると、説明があったと回答している割合が有意に低かった。

表4. 学校休業中の学校からの連絡

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)	
先生から手紙やおたよりで連絡があった	67.3%	68.1%	
先生から電話で連絡があった	56.1%	58.9%	
学校のホームページで先生からのメッセージや動画を見ることができた	46.1%	50.8%	*
先生からメールで連絡があった	41.8%	44.0%	
インターネットを使用して授業の配信があった	22.3%	25.9%	*
先生の家庭訪問があった	21.2%	21.1%	

表4は、学校休業中に学校からどのような形で連絡があったかについての回答結果である。2・3年生の保護者の回答について見ていくと、1年生の保護者と同様、半数以上が手紙・おたよりや電話での連絡があったと回答している。一方で、学校ホームページを通じたメッセージ動画の配信やメールでの連絡、インターネットでの授業配信が行われていたという回答は、半数を下回っていた。家庭訪問が行われていたという回答はともに2割強であった。

なお、2・3年生の保護者では1年生の保護者に比べて、学校ホームページを通じたメッセージ動画の配信やインターネットでの授業配信が行われたと回答している割合が有意に低かった。

表 5. 学校休業中の宿題

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)
前の学年の復習プリントが配られた	70.9%	—
親が関わらないとできない宿題が出た	61.6%	62.2%
まだ学校で習っていない内容の宿題が出た	58.3%	60.1%
宿題でわからないことは学校に質問することができた	24.4%	31.2% ***

表 5 では学校休業中の宿題についての回答結果を示した。2・3年生の保護者においても1年生の保護者と同様、親が関わらないとできない宿題やまだ学校で習っていない内容の宿題が出されたと回答している割合が半数を超えていた。一方で、宿題でわからないことは学校に質問することができたと回答している2・3年生の保護者は4分の1弱であり、その割合は1年生の保護者と比べても有意に低かった。

以上の結果からは、学校休業中の学校の対応は手紙・おたよりや電話などのインターネットを介しない方法が主体であったことがうかがえる。また、子どもや保護者の負担が大きい宿題の出され方も多かった一方で、多くの学校が保護者の宿題に関する困りごとに十分に答える態勢ではなかった可能性も読み取れる。

なお、学校休業中の過ごし方の説明やインターネットを介する対応、宿題への質問の対応については、1年生に対しての方が2・3年生に対してよりも手厚く行われていた様子が見出せる。

### 3.2. 学校休業中の子どもの生活

次に、学校休業中に子どもたちがどのような生活を送り、どのような様子を示していたのかについて、表 6・表 7 をもとに確認していきたい。

表 6. 学校休業中の子どもの生活

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)
<b>起床・就寝時間</b>		
毎日決まった時間に寝ていた	74.8%	78.7% *
毎日決まった時間に起きていた	73.1%	77.7% **
寝る時間が学校休業の前よりも遅くなった	60.9%	51.0% ***
起きる時間が学校休業の前よりも遅くなった	62.9%	55.2% ***
<b>食生活</b>		
毎日朝ごはん、昼ごはん、夜ごはんを食べていた	92.0%	92.2%
ふだんよりお菓子を多く食べていた	60.6%	57.4%
<b>日中の過ごし方</b>		
勉強に毎日取り組んでいた	75.3%	78.4%
テレビやDVD、インターネットの動画を見ていることが多かった	86.8%	83.7% *
テレビゲームやインターネットゲームで遊ぶことが多かった	70.2%	60.4% ***
<b>家庭外との関わり</b>		
家族以外の人と話す機会があった	36.1%	35.8%
学童保育に通っていた	17.6%	22.6% **
塾や習い事に通っていた	21.7%	19.3%

※ %は「とてもあてはまる」と「すこしあてはまる」の合計

表 6 は、学校休業中に子どもがどのような生活を送っていたのかについての回答結果である。全体を通して、家庭での起床・就寝時間、食事、勉強などの生活リズムは概ね維持されていたが、動画の視聴やゲームで遊ぶ機会が多かった子どもが大多数であったこと、家族以外との関わりがほとんどなかった子どもも多かったことなどを読み取ることができる。

また、2・3年生と1年生の回答の間に有意な差がみられる項目も多かった。2・3年生では、毎日決まった時間に起床・就寝していたと回答している割合が有意に低く、起床・就寝時間が遅くなったと回答している割合が有意に高かった。また、動画の視聴やゲームの機会が多かったと回答している割合も2・3年生の方が有意に高かった。なお、学童保育に通っていた児童の割合は、2・3年生の方が有意に低かった。

表 7. 学校休業中の子どもの様子

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)	
<b>心理面</b>			
甘えたがった	53.8%	58.8%	*
イライラしていた	37.6%	34.9%	
元気がなかった	23.1%	21.2%	
<b>身体面</b>			
体力が落ちた	55.3%	42.8%	***
体重が増えた	38.0%	31.7%	**
寝つきが悪かった	29.3%	28.6%	
食欲が落ちた	14.4%	13.4%	
体重が減った	6.3%	7.1%	
<b>登校意欲</b>			
学校に行きたがった	62.3%	57.1%	*
学校に行くのを不安に 感じるようになった	21.0%	27.7%	***

※ %は「とてもあてはまる」と「すこしあてはまる」の合計

表 7 は、学校休業中に子どもがどのような様子を  
示していたのかについての回答結果である。2・  
3 年生について確認すると、心理面では甘えたが  
った、身体面では体力が落ちたという回答が半数  
を超えていた。また、イライラしていたという回  
答や体重が増えたという回答も 3 分の 1 を超えて  
いた。登校意欲については、6 割強が学校に行き  
たがったと回答している一方で、学校に行くのを  
不安に感じるようになったと回答している保護者  
も 2 割強いた。

2・3 年生と 1 年生の保護者の回答結果を比較す  
ると、2・3 年生については、甘えたがったとい  
う回答の割合は 1 年生と比べて有意に低かったが、  
体力が落ちたという回答や体重が増えたという回  
答の割合は有意に高かった。また、登校意欲につ  
いては、学校に行きたがったと回答している割合  
は有意に高く、学校に行くのを不安に感じるよ  
うになったという回答の割合は有意に低かった。

以上の結果からは、2・3 年生においても家庭で  
の生活リズムは概ね維持されている傾向にあるが、  
1 年生と比べて起床・就寝時間が変化したり、動  
画視聴・ゲームの頻度が高かったりしたケースも  
多かったことがうかがえる。また、子どもたちは  
ストレスや不安、体力の減退や体重の増加などさ  
まざまな徴候を示しているが、2・3 年生では 1 年  
生以上に、体力の減退や体重の増加が見られたケ  
ースも多かったようである。また、登校意欲に関  
しては、2・3 年生の方が 1 年生より安定して維持  
されていた様子が読み取れる。

### 3.3. 学校休業中の保護者の生活

学校休業中に保護者が子どもとどのように関わり、  
どのようなことを感じていたのかについては、  
表 8・表 9 をもとに確認していく。

表 8. 学校休業中の子どもの関わり

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)	
<b>日中の関わり</b>			
子どもと話をするように心がけた	87.9%	89.9%	
子どもといっしょに 遊ぶことを心がけた	80.2%	83.9%	*
子どもといっしょに 体を動かす時間をつくった	76.3%	80.6%	*
子どもといっしょに 料理やお菓子作りをした	62.1%	64.7%	
<b>食事面</b>			
バランスの取れた食事を心がけた	77.7%	77.1%	
<b>学習面</b>			
子どもの勉強をみた	89.7%	90.7%	
学校の宿題とは別に 補充教材を用意した	76.8%	80.0%	

※ %は「とてもあてはまる」と「すこしあてはまる」の合計

表 8 は、学校休業中の保護者と子どものかか  
わりについての回答結果である。2・3 年生の保護  
者においても 1 年生の保護者においても、7 項目  
すべてで 6 割以上の保護者が「あてはまる」と回  
答しており、学校休業中にさまざまな形で子ども  
にケアや教育を提供しようとしていた様子が見ら  
れる。

ただし 2・3 年生の保護者については、子どもと  
一緒に遊ぶことを心がけたり、体を動かす時間をつ  
くったりしたという回答の割合が、1 年生の保  
護者に比べて有意に低いという結果も見られた。

表 9. 学校休業中に感じたこと

	2・3年生 (n=1000)	1年生 (n=1400)	
<b>子どもとの深い関わり</b>			
子どもとたくさん話せた	79.0%	80.9%	
子どもとゆっくり過ごせた	76.4%	75.7%	
<b>精神的負担</b>			
子どものことで いつもより忙しかった	70.9%	70.2%	
子どものことでいつもより疲れた	67.6%	67.9%	
子どものことで イライラすることが増えた	56.7%	53.8%	
子どもをしかることが増えた	57.2%	53.3%	
<b>勉強・宿題への不安・心配</b>			
子どもの勉強が 遅れてしまうことが不安だった	73.2%	64.8%	***
子どもの宿題のことが心配だった	67.8%	55.9%	***

※ %は「とてもそう思う」と「すこしそう思う」の合計

表 9 は、学校休業中に保護者が子どもとの関わりの中で感じていたことについての回答結果である。2・3年生の保護者についても1年生の保護者についても、全体的な傾向としては、子どもとたくさん話せたりゆっくり過ごせたりしたと感じている人も多かったが、精神的負担が大きかったと感じていた人や、勉強・宿題への不安・心配を抱えていた人も多かった様子が見える。

2・3年生と1年生の保護者の回答の比較では、子どもとの深い関わりや精神的負担に関する項目では有意な差はみられなかった。一方で、子どもの勉強が遅れることへの不安や宿題への心配があったと回答する割合については、2・3年生の保護者の方が有意に高かった。

以上の結果からは、2・3年生の保護者も1年生の保護者と同様、多くの保護者が学校休業中に子どもにさまざまな形でケアや教育を提供しようと、深く関わっていたことが見出せた。ただし、遊びや運動についての心がけや行動については、1年生の保護者の方がより手厚かった様子も読み取れた。

一方で、多くの保護者が精神的な負担や勉強・宿題への不安・心配を感じており、勉強・宿題への不安や心配については、2・3年生の保護者の方がより抱きやすかった様子も浮かび上がった。

#### 4. 世帯の暮らし向きによる子どもと保護者の生活の差異

ここからは、2・3年生の保護者の回答に限定して、世帯の暮らし向きによって学校休業中の子どもと保護者の生活にどのような差異が見られるのかについて検討していく(1年生の保護者の回答についての分析結果は、別稿<sup>[1]</sup>に記載)。

暮らし向きについては、「豊か」「やや豊か」「どちらかといえば豊か」の回答を「豊か」(612 ケース)、「どちらかといえば苦しい」「やや苦しい」「苦しい」の回答を「苦しい」(338 ケース)とし、「わからない・答えたくない」と回答した50 ケースは分析から除外した。

まずは、表 6・表 7 で示した学校休業中の子どもの生活に関する質問項目について、暮らし向きが豊かか苦しいかによってクロス集計の検定結果が有意であった項目のみを掲載したものが表 10 である。

表 10. 暮らし向きによる子どもの生活の差異

	豊か (n=612)	苦しい (n=338)	
<b>学校休業中の子どもの生活</b>			
毎日決まった時間に寝ていた	80.2%	65.7%	***
毎日決まった時間に起きていた	76.8%	66.9%	***
寝る時間が学校休業の前よりも遅くなった	59.2%	65.7%	*
起きる時間が学校休業の前よりも遅くなった	60.9%	68.0%	*
勉強に毎日取り組んでいた	80.6%	67.8%	***
テレビゲームやインターネットゲームで遊ぶことが多かった	68.3%	74.9%	*
塾や習い事に通っていた	24.3%	18.0%	*
<b>学校休業中の子どもの様子</b>			
体力が落ちた	53.8%	60.7%	*

※ %は「とてもあてはまる」と「少しあてはまる」の合計

学校休業中の子どもの生活については、12項目中7項目で有意差が見られた。暮らし向きが苦しいと回答した保護者の方が、子どもが毎日決まった時間に起床・就寝していたと回答している割合が低く、起床・就寝時間が遅くなったと回答している割合が高かった。また、ゲームで遊ぶ機会が多かったと回答している割合が高く、勉強に毎日取り組んでいたという回答や、塾や習い事に通っていたという回答の割合は低かった。

なお、1年生の保護者の回答結果についての同様の分析では、暮らし向きによって有意差がみられたのは12項目中3項目であった<sup>[1]</sup>。クロス集計のカイ2乗検定ではサンプルサイズが小さい方が有意になりにくいいため、もし両者が同様の回答傾向であったならば、サンプルサイズが小さい2・3年生の保護者の回答結果の方が有意になりにくい。にもかかわらず2・3年生の保護者の回答結果に有意差が見られる項目が多いということからは、2・3年生の方が1年生以上に暮らし向きによる家庭生活の違いが生じやすかった可能性が示唆される。

一方で、学校休業中の子どもの様子については、有意差が見られた項目は10項目中1項目のみであった(1年生では10項目中3項目で有意)。唯一、子どもの体力が落ちたという回答の割合については、暮らし向きが苦しいと回答した保護者の方が有意に高かった。

続いて、表 8・表 9 で示した学校休業中の保護者の生活に関する質問項目について、暮らし向きが豊かか苦しいかによってクロス集計の検定結果が有意であった項目のみを掲載したものが表 11 である。

表 11. 暮らし向きによる保護者の生活の差異

	豊か (n=612)	苦しい (n=338)	
<b>学校休業中の子どもの関わり ※1</b>			
子どもと話をしように心がけた	91.5%	83.1%	***
子どもといっしょに遊ぶことを心がけた	84.5%	74.0%	***
子どもといっしょに料理やお菓子作りをした	65.4%	57.4%	*
バランスの取れた食事を心がけた	82.2%	71.0%	***
学校の宿題とは別に補充教材を用意した	81.2%	70.4%	***
<b>学校休業中に感じたこと ※2</b>			
子どもとゆっくり過ごせた	79.2%	73.4%	*
子どもの勉強が遅れてしまうことが不安だった	69.8%	80.8%	***

※1 %は「とてもあてはまる」と「すこしあてはまる」の合計

※2 %は「とてもそう思う」と「すこしそう思う」の合計

学校休業中の子どもの関わりについては、7項目中5項目で有意差が見られた(1年生も7項目中5項目で有意)。暮らし向きが苦しいと回答した保護者の方が、子どもと話をしたり遊んだりするよう心がけたり、料理やお菓子作りをしたり、バランスの取れた食事を心がけたり、補充教材を用意したりしたと回答した割合が低かった。

学校休業中に感じたことについては、有意差が見られたのは8項目中2項目であった(1年生では8項目中6項目で有意)。暮らし向きが苦しいと回答した保護者の方が、子どもとゆっくり過ごせたと回答している割合が低く、勉強が遅れることが不安だったと回答している割合が高かった。一方で、精神的負担に関する4項目については、いずれも有意差はみられなかった。

以上の結果からは、2・3年生とその保護者の場合、暮らし向きによる学校休業中の生活の差異は、とくに子どもの生活や保護者の子どもとの関わりにより多く見られることがわかった。暮らし向きが苦しい家庭では、子どもの生活リズムを維持することや、勉強するための環境を整えること、さまざまなケアを提供することなどが難しい状況に置かれていた様子が見られる。また、これらの暮らし向きによる差異は、1年生とその保護者以上に生じやすいものであったことも示唆される。

一方で、学校休業中の心理面・身体面の様子や登校意欲、保護者の精神的負担については、暮らし向きによる差異はそこまで顕著ではなかった。

## 5. 世帯構造による子どもと保護者の生活の差異

世帯構造(両親と同居か、片方の親のみ同居か)によって、学校休業中の子どもと保護者の生活にどのような差異が見られるのかについても確認しておきたい。ここでも2・3年生の保護者の回答結果に限定して紹介する(1年生の保護者の回答についての分析結果は、別稿<sup>[1]</sup>に記載)。

本調査では子どもが父親・母親と同居しているか否かについて尋ねており、父親・母親の両方と同居していると回答した916ケースを「両親と同居」、どちらか片方と同居していると回答した72ケースを「片方の親のみ同居」とした。父親・母親ともに子どもと同居していないと回答した12ケースについては、分析から除外した。

なお、「片方の親のみ同居」に分類されたケースの中には、仕事の都合で片方の親が単身赴任している家庭なども含まれる。そのため、今回の分類は「ふたり親世帯」「ひとり親世帯」とは厳密に一致するものではなく、日常の子育てを1人の親が担っていたか、2人の親が担っていたかについて捉える分類だと考えてほしい。

以下の表12・表13では、学校休業中の子どもと保護者の生活に関する質問項目について、世帯構造によってクロス集計の検定結果が有意であった項目のみを掲載したものである。

表 12. 世帯構造による子どもの生活の差異

	両親と同居 (n=916)	片方の親のみ同居 (n=72)	
<b>学校休業中の子どもの生活</b>			
学童保育に通っていた	16.7%	27.8%	*
<b>学校休業中の子どもの様子</b> (有意差があった項目なし)			

※ %は「とてもあてはまる」と「すこしあてはまる」の合計

学校休業中の子どもの生活については、表12にあるように、回答結果に有意差が見られた項目は1項目のみであった(1年生の保護者では3項目で有意)。片方の親のみが子どもと同居する家庭では、子どもが学童保育に通っていたと回答している割合が有意に高かった。

表 13. 世帯構造による保護者の生活の差異

	両親と同居 (n=916)	片方の親のみ同居 (n=72)	
<b>学校休業中の子どもとの関わり ※1</b>			
子どもの勉強をみた	90.6%	81.9%	*
<b>学校休業中に感じたこと ※2</b>			
(有意差があった項目なし)			
※1 %は「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」の合計			
※2 %は「とてもそう思う」と「すこしそう思う」の合計			

また、学校休業中の保護者の生活についても、表 13 にあるように、回答結果に有意差が見られた項目は 1 項目のみであった（1 年生の保護者では 3 項目で有意）。片方の親のみが子どもと同居する家庭では、子どもの勉強をみたと回答している割合が有意に低かった。

上記に示した通り、2・3 年生の保護者の回答結果については、ほとんどの質問項目で世帯構造による有意差はみられなかった。ただしその理由としては、「片方の親のみ同居」が 72 ケースのみであり、検定結果が有意になりにくかったことが一因だと考えられる。実際には、子どもと保護者の生活に関する 35 の質問項目のうち、「両親と同居」と「片方の親のみ同居」の間で、両者の回答の割合に 5 ポイント以上の差があった項目は 14 項目あった。今回の結果に関しては、「世帯構造によって差はほとんど生じなかった」のではなく、「世帯構造によって差が生じたと主張できるのは 2 項目のみであった」と解釈するのが適切であるだろう。

## 6. 総合考察

### 6.1. 2・3 年生と 1 年生の共通点と差異

別稿<sup>[1]</sup>では、1 年生の保護者の回答結果を振り返り、学校休業中はどのような家庭においても、子どものケアや教育にかなり力を入れて取り組んでいたとまとめている。一方で、コロナ禍や学校の休業が無視しえない割合の子どもにストレスや不安を生じさせていたこと、学校からの宿題が子どもや保護者に大きな負担をかけていたこと、子どもの勉強の遅れについての保護者の心配に学校が十分に対応できていなかったことなども指摘している。こうした傾向は、2・3 年生の保護者の回答結果でもおおむね共通していたと言えるだろう。

一方で、2・3 年生の保護者と 1 年生の保護者の回答結果からは、両者の学校休業中の生活に以下の 3 点の差異があったことが示唆される。

1 点目は、2・3 年生の保護者による学校休業中

の子どもへのケアは、1 年生の保護者ほど手厚くはなかったということである。回答結果からは、2・3 年生の方が 1 年生よりも起床・就寝時間が遅くなったり不規則になったりしがちであった様子がうかがえた。また、2・3 年生の方が動画の視聴やゲームの頻度が増え、体力が落ちたり体重が増加したりしていた様子も浮かび上がった。

しかし、2・3 年生の保護者によるケアが 1 年生の保護者ほど手厚くなかった理由を、怠惰や油断といった保護者の態度に求めるのは間違っているだろう。というのも 2・3 年生の母親の方が、1 年生の母親よりも、学校休業中に職場に出勤していた割合が高かったためである（表 14）。

表 14. 保護者の緊急事態宣言発令中の出勤頻度  
(子どもの学年別)

	2・3 年生 (n=1000)	1 年生 (n=1400)
<b>父親の緊急事態宣言期間中の出勤頻度</b>		
毎日(休日以外)、出勤した	46.1%	44.4%
週3、4日は出勤した	15.7%	16.6%
週1、2日は出勤した	14.9%	14.9%
毎日(休日以外)、在宅勤務だった	17.1%	18.4%
仕事をしていなかった	3.4%	3.3%
そういう人はいない	2.8%	2.5%
<b>母親の緊急事態宣言期間中の出勤頻度</b>		
毎日(休日以外)、出勤した	16.0%	12.2%
週3、4日は出勤した	17.3%	13.4%
週1、2日は出勤した	12.7%	12.4%
毎日(休日以外)、在宅勤務だった	8.1%	8.9%
仕事をしていなかった	44.8%	50.4%
そういう人はいない	1.1%	2.7%

表 14 にあるように、2・3 年生の母親は 1 年生の母親に比べて、緊急事態宣言発令中（つまり学校休業中）に「仕事をしていなかった」と回答している割合が低く、週 3 日以上出勤していたと回答している割合が高い。一方で父親については、子どもの学年による出勤頻度の違いはほとんどみられなかった。

2・3 年生の母親の中には、小学校等への入学時に仕事と子育ての両立が難しくなる「小 1 の壁」<sup>[5]</sup>にぶつかりながらも、やがて学校生活のリズムをつかみ、仕事を再開したという人も少なくなっただろう。その結果、学校休業中にも出勤を迫られ、仕事と家庭での子どもの配慮との両立を強いられた母親が多くなったことが、2・3 年生と 1 年生の保護者の間でケアの手厚さに違いが出たことの背景にあったのではないかと考えられる。

2 点目は、2・3 年生の保護者の方が 1 年生の保

護者よりも、勉強や宿題への不安・心配を抱く傾向にあったということである。そうした不安・心配は自由記述欄にもたびたび記載されており、「勉強があまり得意ではなく、1年生で習った漢字を忘れており、漢字数が増える2年生で勉強がついていけるか心配でした」「学校からの課題を親が採点したり教えたりする事が、親の時代の教え方と違うので、凄く不安だった」などの記述が見られた。

2・3年生になると、学習内容の難易度が1年生より上がるにもかかわらず、学校休業中はその教え方まで保護者に委ねられていたことがうかがえる。そうした点が、勉強や宿題への不安・心配を高める一因になっていたのではないかと考えられる。

3点目は、2・3年生の方が1年生より登校意欲が高い傾向にあったということである。2・3年生には学校に通った経験があり、すでに友人もできている。そのことが、子どもたちの学校に行きたい気持ちを強め、学校生活に対する不安を和らげていたのではないかと考えられる。

## 6.2. 暮らし向きによる差異

また、2・3年生の保護者に限定した分析では、世帯の暮らし向きによる差異も見られた。暮らし向きが苦しい家庭の方が、学校休業中に子どもの生活リズムを維持することや、子どもの学習環境を整えること、子どもにさまざまなケアを提供することなどが難しかった様子が明らかになった。

しかしこうした差異が生まれた理由を、「暮らし向きが苦しい家庭は怠惰だから」というように、保護者の態度に求めるのはやはり間違っているだろう。というのも、暮らし向きが苦しい家庭に関しても、学校休業中の保護者の出勤頻度が高い傾向にあったことがうかがえるためである(表15)。

表15. 保護者の緊急事態宣言発令中の出勤頻度  
(世帯の暮らし向き別)

	豊か (n=612)	苦しい (n=338)
<b>父親の緊急事態宣言期間中の出勤頻度</b>		
毎日(休日以外)、出勤した	40.8%	56.5%
週3、4日は出勤した	17.6%	12.4%
週1、2日は出勤した	17.6%	10.1%
毎日(休日以外)、在宅勤務だった	20.4%	11.2%
仕事をしていたなかった	2.6%	5.0%
そういう人はいない	0.8%	4.7%
<b>母親の緊急事態宣言期間中の出勤頻度</b>		
毎日(休日以外)、出勤した	14.2%	18.3%
週3、4日は出勤した	17.0%	18.6%
週1、2日は出勤した	13.2%	13.0%
毎日(休日以外)、在宅勤務だった	9.6%	4.7%
仕事をしていたなかった	44.9%	45.0%
そういう人はいない	1.0%	0.3%

表15からは、暮らし向きが苦しいと回答した家庭の父親ほど、学校休業中に毎日出勤していたと回答した割合が高く、在宅勤務であったと回答した割合が低いことがわかる。

暮らし向きが苦しい家庭では、父親の出勤頻度が高く、父親が子どもに関わる時間が十分に取れなかったケースも多かったと考えられる。そのことが、暮らし向きによる子どもの生活や保護者の子どもとの関わりの差異に結びついていたのではないかと推察される。

今回の学校休業によって暮らし向きが苦しい家庭の子どもや保護者が直面した不平等や、それによって今後生じうる不平等の拡大に対しては、何らかの形で補償が行われていくべきだろう。しかし、今回の学校休業で子どもや保護者が被った不平等の種類は多岐にわたり、それらが今後さまざまな不平等へと派生しうることを考えると、それらの補償を教育の領域のみで行おうとすることは現実的ではないだろう。そのため補償は、子ども・保護者の両者を射程に入れたうえで、所得や承認などのさまざまな財が等しく配分される「結果の平等」を志向して行われる必要がある。

## 6.3. 今後の検討課題

本稿の分析では、子どもの学年や世帯の暮らし向きなどによって、学校休業中の子どもや保護者の生活に差異が生まれていたことを指摘した。今後の課題としては、こうした差異が具体的にどのような要因によって生まれていたかについての検討が挙げられる。

本稿ではそうした要因の候補の1つとして、保

護者の出勤頻度を挙げた。しかし、実際に保護者の出勤頻度が何にどの程度の影響を与えていたのか、他にも影響力をもつ要因はないのかなどの課題については、多変量解析によって改めて検討を行う必要がある。

また、本稿で分析を行った Web 調査では、緊急事態宣言が解除されて学校が再開した後に、学校や教師がどのような対応を行ったのか、子どもたちはどのような様子であったのかについても質問項目を設けている。学校再開後の子どもの様子に差異を生み出す要因についても、検討を行う必要があるだろう。

学校休業中や学校再開後の子どもや保護者の生活に差異を生み出す要因を描き出すことができれば、今後緊急事態によって学校休業を決断しなければならないときに配慮すべき、政策上の留意点についても検討を進めることができるだろう。そうした政策的示唆の提示も今後の課題としたい。

#### 付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究 (C) 20K02614「困難を抱える子どもの就学における排除と包摂に関する研究——「資源」概念に基づいて」(研究代表者:酒井朗),若手研究 (B) 16K21021

「児童生徒の長所・資源に着目した生徒指導モデルの構築」(研究代表者:伊藤秀樹)の助成を受けた研究成果の一部である。

#### 引用文献

- [1] 酒井朗ほか, コロナ禍における小学校就学時の子どもと保護者の生活. 上智大学教育学論集. 2021, (55), p.59-76.
- [2] OECD. “The impact of COVID-19 on student equity and inclusion: supporting vulnerable students during school closures and school re-openings”. <http://www.oecd.org/coronavirus/policy-responses/the-impact-of-covid-19-on-student-equity-and-inclusion-supporting-vulnerable-students-during-school-closures-and-school-re-openings-d593b5c8/>, (accessed 2021-2-15).
- [3] 前馬優策. “コロナショックで広がる教育格差”. 東洋館出版社編. ポスト・コロナショックの学校で教師が考えておきたいこと. 東洋館出版社, 2020, p.20-25.
- [4] 末富芳. 教育格差と子どもの貧困をどうする?. 季刊教育法. 2020, (206), p.46-51.
- [5] 内閣府. 平成 27 年度版 少子化社会対策白書 全体版. 2015.

(受付日:2021年3月2日, 受理日:2021年7月15日)

#### 伊藤 秀樹 (いとう ひでき)

現職:東京学芸大学教育学部准教授

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学. 博士 (教育学)  
専門は教育社会学. 現在は学校生活や社会生活の中で困難に直面しやすい子どもへの, 教育支援・自立支援のあり方について研究を進めている.

主な著書:『高等専修学校における適応と進路』(単著, 東信堂) など.